ほんとうに生き生きとした機関紙

機関紙は、指導的でたえず筆をとっている五人の文筆家にたいして、文筆家でない活動家が五百人、五千人といるときに、生き生きとした、活気にあふれたものとなるのである。旧『イスクラ』の欠陥の一つ――私がつねに旧『イスクラ』からそれをとりのぞこうとつとめてきた（そして新『イスクラ』において法外な規模にたっした）――は、ロシアからの協力が弱かったことである。われわれはロシアからおくってきたものをみな、ほとんど例外なしに、いつも掲載してきたものである。ほんとうに生き生きとした機関紙は、おくられてきたものの十分の一をかならず掲載し、残りのものを文筆家への情報と指示のために利用するようにしなければならない。また、できるだけ多勢の党活動家が、われわれと通信をかわすようになり、それも、文筆的な意味でではなく、普通の意味で、かわすようにならなければならない。

ロシアからの疎外状態と、国外ののろうべき沼地の息のつまるような空気とが、ここではひどく息苦しいので、唯一の救いの道はロシアと活発に交通（文通？）することである。口先だけでなく、実際にわれわれの機関紙を「多数派」全体の機関紙、ロシア国内の活動家大衆の機関紙とみなそうとおもっている（またそういう機関紙にしようとおもっている）人は、このことをわすれてはならない。この機関紙を自分のものとみなし、社会民主主義者――党員――の義務を自覚している人はすべて、合法新聞にたいするばあいによくみうけられるような考え方および行動のブルジョア的な習慣を、すなわち**彼らの**仕事は書くことであり、われわれの仕事は読むことであるとみる習慣を、これきり永久に棄てなければならない。すべての社会民主主義者が社会民主主義的新聞の仕事に従事しなければならない。われわれは、すべての人々、とくに労働者に、通信をよこすようにおねがいする。われわれの新聞に、すべてのことについて、一つのこらずすべてのことについて書いてよこし、自分たちの日常生活や関心や仕事についてできるだけたくさん書いてよこす、できるだけ広範な機会を労働者にあたえたまえ。――こういう資料がなければ、社会民主主義的機関紙も三文の値打ちしかなく、社会民主主義的という名称に値いしないであろう。そのほかに、**文通**のために、すなわち、わざわざ通信文としてではなく、つまり発表するためではなく、編集局と同志的に文通し、それに情報をあたえ、事実や出来事についてばかりでなく、気分についても、運動の日常の、「おもしろくない」、ありふれた茶飯事的な側面についても、情報をあたえるために書くことを、われわれはおねがいする。諸君は国外に滞在したことがないので、われわれがこのような手紙をどんなに必要としているかを、想像できないかもしれない（これらの手紙には秘密事項はまったくなにもなく、一週間に一度か二度、このような暗号ぬきの手紙を書くことは、実際、どんなに忙しい人にもまったく可能なことである）。労働者サークルでの会談、これらの会談の性格、研究のテーマ、労働者の質問、宣伝と煽動の組織方法、社会、軍隊および青年のなかでのつながりについて、書いてよこしたまえ。労働者のあいだでのわれわれ社会民主主義者にたいする不満や、彼らの疑念、質問、抗議等について、なによりも多く書いてよこしたまえ。仕事の実際の組織方法の問題は、とくにいま関心をひく。そして通信的なものでない、まったく同志的な、活発な文通以外には、編集局にこれらの問題の様子を熟知させる手段はないのである。

もちろん、だれにでも書く能力と興味があるわけではないが、しかし――できないといってはならない。したくない、といいたまえ。もし書きたいとおもうなら、いつでも、どんなサークルにでも、ごく小さなグループにでも、まったく第二義的なグループにでも（第二義的なグループはしばしばとくに関心をひく、なぜなら、ときにはそれは仕事の、もっとも重要な――たとえ目につかなくとも――部分をやっているからである）、書く能力のある同志を一人や二人みつけだすことができる。　……われわれは委員会だけに、また書記だけに、文通を集中するというやり方にならないように、とくに警戒したい。このような独占ほど有害なものはない。行動や決定における統一がぜひ必要であるのと同じ程度に、一般的な情報活動や文通における統一は誤りである。非常にしばしばみられることであるが、比較的「局外の」（委員会からはなれている）人たちの手紙、経験に富む古い活動家にはあまりにも慣れっこになっているので、みのがしているような多くの事がらをより**生き生きと**感じている人たちの手紙は、とくに興味ぶかい。われわれに書く機会を、できるだけ多く若い活動家にあたえたまえ。すなわち、青年にも、労働者にも、「中央集権主義者」にも、組織者にも、ビラをまいたり大衆集会に参加する平党員にも。

そうなってはじめて、このような広範な文通があってはじめて、われわれはみな共同して、われわれの新聞を**ロシア国内における労働運動の**ほんとうの機関紙とすることができる。この手紙をありとあらゆる集会、サークル、小グループその他のところで、できるだけ広範に読みあげ、労働者がこの呼びかけをどうむかえたかをわれわれに書いてよこすように、切におねがいする。労働者的な（「大衆的な」）機関紙と一般的な――指導的な――インテリゲンツィア的新聞とをわける考えには、われわれは非常に懐疑的である。われわれは、社会民主主義的新聞が運動全体の機関紙となり、労働者新聞と社会民主主義的新聞とが一つの機関紙に融合するようにしたい。これを達成することは労働者階級のもっとも積極的な支持があるばあいにはしめて可能である。

同志のあいさつをもって　　**エヌ・レーニン**

一九〇四年十一月二十九日（十二月十二日）に執筆

一九〇四年十二月に単行のリーフレットとして発表

リーフレットのテキストによって印刷

第七巻　同志諸君への手紙　P562~565

コメント

社会民主主義者――党員――の義務を自覚している人はすべて、彼ら（文筆家）の仕事は書くことであり、われわれの仕事は読むことであるとみる習慣を、これきり永久に棄てなければならない。

ほんとうに生き生きとした機関紙は､おくられてきたものの十分の一をかならず掲載し、残りのものを文筆家への情報と指示のために利用するようにしなければならない｡そして、できるだけ多勢の党活動家が、われわれと通信をかわすようになり、それも、文筆的な意味でではなく、普通の意味で、かわすようにならなければならない。

自分たちの日常生活や関心や仕事について、事実や出来事についてばかりでなく、気分についても、運動の日常の、「おもしろくない」、ありふれた茶飯事的な側面についても、労働者のあいだでのわれわれ社会民主主義者にたいする不満や、彼らの疑念、質問、抗議

等について、できるだけたくさん書いてよこす、できるだけ広範な機会を労働者にあたえなければならない。こういう資料がなければ、社会民主主義的機関紙も三文の値打ちしかなく、社会民主主義的という名称に値いしない。

仕事の実際の組織方法の問題は、とくにいま関心をひく。そして通信的なものでない、まったく同志的な、活発な文通以外には、編集局にこれらの問題の様子を熟知させる手段はないのである。

情報を共有することや行動や決定における統一がぜひ必要であるのと同じ程度に、一般的な情報活動や文通における統一は誤りである。

機関紙は、指導的でたえず筆をとっている五人の文筆家にたいして、文筆家でない活動家が五百人、五千人といるときに、生き生きとした、活気にあふれたものとなるのである。このような広範な文通があってはじめて、われわれはみな共同して、われわれの新聞をロシア国内における労働運動のほんとうの機関紙とすることができる。そして、われわれの新聞は労働者新聞と社会民主主義的新聞とが一つの機関紙に融合するようにしなければならない。

大衆集会の党にとっての意義

論文『1895 年と 1905 年（ちよっとした対比）』のプラン*

八　……プロレタリアートにたいする政治的はたらきかけと社会民主主義的教育の主要な手段である「マッソーフカ」〔大衆的集会〕

＊　この論文は書かれなかった。

第 41 巻　論文『1895 年と 1905 年（ちよっとした対比）』のプラン　P143

1905 年 1 月 9(22) 日以前に執筆